

〈講述經驗〉教學綱要之建構的探討

工藤節子

東海大学日本語言文化学系 助理教授

摘要

本文以探討架構學習者講述經驗時所需教學綱要為目的，首先參考既有研究成果，彙整談話之構成要素；其後分析訪談 11 名母語話者之資料、並調查已出版之教材的實際狀況。依此分析，本文確認講述特定課題之經驗時，應具備以下之談話的要素語言與形式：1. 時間及場所（～の時のことなんですけど）、2. 狀況（で／～て、～んですね、～んです）、3. 事情内容（～たら～んです）、4. 結果（～んです）、5. 評價（形容詞～です）、6. 結束（～という話です）。同時，基於其為相互行為之講述，並確認其尚包含對聽話者之理解的考量（～ってわかりますか）、聽話者對資訊之確認（それで結局どうなったんですか）的要素。在上述基礎上，本文提議架構包含言語形式、談話要素、策略、社會語言學要素及達成課題之指標在內之教學綱要。為了提供給學習者更具體的教學綱要，擴大分析敘述場景之資料的範圍、並持續架構教學綱要之基礎研究為今後之課題。

關鍵詞：相互行為、講述經驗、談話要素、言語形式、教學綱要

受理日期：2013.08.31

通過日期：2013.10.26

A study toward constructing the syllabus of storytelling

Kudo Setsuko

Assistant Professor, Tunghai University

Abstract

This paper attempts to identify the syllabus for the learners to tell the story about past experience. First, I review the element of discourse and language forms in storytelling through previous research, then examine these feature by analyzing 11 storytelling data of Japanese native-speakers. The analysis of 11 data reveals that the structure of storytelling consist of 6 elements :Setting (~の時のことなんですけど , Situation (で / ~て , ~んですね , ~です) , Narrative events (~たら ~んです) , Result (~んです) , Evaluation (形容詞 ~です) , and Ending Remarks (~という話です) . Because storytelling activity is the interaction between a speaker and a listener, checking understanding of a listener (~ってわかりますか) and requesting further information (それで結局どうなったんですか) were also needed. After reference on a textbook written aimed for storytelling, I presented the syllabus of storytelling which include language forms, elements of discourse, strategy, sociolinguistic elements, and the indicators to evaluate language performance. In order to provide more specific expressions for the learners, further research of syllabus based on the data analysis is required in the future.

Keywords: Interaction, Storytelling, Elements of discourse,
Language forms, Syllabus

〈経験を語る〉シラバス構築に向けた一考察

工藤節子

東海大学日本語言文化学系 助理教授

要旨

本稿では、学習者が経験を語る時どのようなシラバスが必要かを探るために、まず先行研究を参考に談話の構成要素を整理した。次に母語話者の11の語りのデータを分析し、既出版されている教材の実態も調べた。これにより、テーマを決めた経験の語りにおいて、1. 時間、場所（～の時のことなんですけど）、2 状況（で／～て、～んですね、～んです）、3 出来事（～たら～んです）、4 結末（～んです）、5 評価（形容詞～です）、6 終了（～という話です）という談話の要素と言語形式が使われることがわかった。また相互行為としての語りであることから、聞き手の理解への考慮（～ってわかりますか）、聞き手による情報確認（それで結局どうなったんですか）、という要素も確認した。ここから、言語形式、談話の流れ、方略、社会言語学的な要素、課題遂行の指標を視野に入れたシラバス構成案を提案した。シラバスをさらに具体的なものにするために、今後語り場の分析範囲を広げ、シラバス構築に向けた基礎研究を続けていく必要がある。

キーワード: 相互行為、経験を語る、談話の要素、言語形式、

シラバス

〈経験を語る〉シラバス構築に向けた一考察

工藤節子

東海大学日本語言文化学系 助理教授

1. はじめに

経験を語る行為はふだん雑談の中でも頻繁に行われる言語活動である。特に外国語の学習者にとっては、自身の体験を外国語で語り、人に理解され反応を得ることで、外国語において自身の存在を意味づける行為とされ¹、外国語教育の目標としても取りあげられている²。しかし経験を語る時にどんな言語形式が必要なのか、どのような談話の進め方が効果的なのかについては、必ずしも明らかにされていない。それは、経験を語るという行為がどこで誰を相手にどのような経験を話すかによって、文型・表現を特定する難しさがあるからだと思われる。親しい友人を相手にした雑談で1カ月前のある出来事を語ることもあれば、面接官の質問に答える形で大学4年間で印象に残っている経験を述べるというような事もあり、当然のことながらそこで求められる言語形式は異なることが予想される。また経験を語る行為は聞き手がいて行われる行為でもあり、聞き手の理解や反応が談話の展開に影響を及ぼす可能性があることが、シラバス化や評価基準の明確化を難しくしていると予想される。

しかし、経験を語る行為が学習者にとって意義のある言語活動であるならば、学習者が遭遇する可能性のある場面を特定した基礎研究を積み重ね、教育に必要なシラバスを明らかにしていくことは急務である。本稿では、シラバス構築に向けた基礎研究として、「友人や教師を相手に、テーマを決めた³「経験を語る」という言語活動で

¹ 矢部（2003：115）

² CEFRのB1レベルの目標に「自分の感情や反応を描写しながら、経験を詳細に述べるができる」がある。（国際交流基金（2009：269））

³ 例えば「うれしかった、恥ずかしかった、焦った」など、テーマを決めた経験談である。テーマを決めた経験談のほうが学習者には練習しやすく、実際

求められるシラバスを、先行研究を参考に母語話者の語りのデータから分析し、既に出版されている教材も参照しながらシラバス構築に向けた考察を行う⁴。

2. 先行研究

2. 1 語り手の談話と言語形式に重きを置いた研究

経験を語るという言語活動は、日本語教育において、「物語」「ナラティブ」という言葉で談話の展開や表現形式を明らかにする基礎研究が行われている。李（2000）は、雑談における経験の語りを「物語」と呼び「過去に発生した出来事の報告」と定義した上で、物語の開始、終結、再開における言語形式の基礎研究を行っている。榊原（2010）も、体験談を語る行為を「物語」と言い、漫才師やお笑い芸人たちが過去に起こった経験を披露するテレビ番組のデータをもとに物語の導入部と終結部で求められる談話の機能と文型を分析した。

一方、木田・小玉（2001）は口頭ナラティブという言葉を使っている。木田・小玉は「語り手自身に実際に起こった、語るに値する、過去の出来事」と定義し、口頭ナラティブの能力を向上させるために歴史的現在形（過去に起こった出来事を現在形で表すこと）、擬声語・擬態語、「タラ」「ソシタラ」の使用を授業で導入した実践例を紹介している。

加藤（2003）は、テレビのトーク番組のデータをもとに「体験談」の言語表現に注目し、接尾辞、接続詞のうち「テ形」「デ」の次に多い「タラ」「ソシタラ」の機能を明らかにした。また、特に体験談に出てくる前件、後件で主体が変わる「タラ」⁵が、語り手が実際は知

に友人と話すこともある場面だと考えた。

⁴ 本論文は行政院國家科學委員會の研究助成（「A1 至 B2 水準之言語行動所須言語能力及評估基準之基礎研究-以台灣的大學生之「說話」的接觸場面為主-」101-2410-H-029-035-）を受けて行った研究成果の一部である。

⁵ 例えば、「電車に乗ったら、ガラ空きだった」（発見）、「寝ていたら、部屋に蜂が入ってきた」（発現）、「店に入ったら、携帯が鳴りだした」（反応）などがある。（加藤 2003：64）

っている話を「意外だ」という評価を込めて展開できる機能をもつと述べている。

また、川合（2003）は、テレビ番組の「体験談」データを分析し、談話展開型としての「デ」「テ形」「～んですけれども」、文脈指示の「ソレ」「ソノ」などが結束性に貢献していることを明らかにした。

このように経験を語る談話に関する基礎研究は、談話の開始と終結部の特徴、出来事の連続性を時系列の中で表すためにどのような言語形式を用いているかが研究されている。

2. 2 聞き手の存在を意識した語りについての研究

一方、経験を語るという行為は相手がいる言語活動であり、李（1998、1999、2000）は、語り手と聞き手の相互行為によって成り立っている物語の開始と終了、再開を分析した。また、嶋津（2005：2）は、特に学習者が自分の経験や過去の出来事を語る行為を「相互行為としてのストーリーテリング」と名付けている。語り手は、聞き手が理解していなければ修正できる能力が求められ、聞き手は、相槌や指示対象の明確化要求、意味の交渉のための質問、理解の提示など、その場で適切とされる反応を示しながら、語り手のストーリーの構築に貢献していると言う。これを受け、工藤（2013）は、接触場面で学習者の経験談を聞く日本籍の TA⁶の行動に注目し、聞き手の相槌や共感を示す態度やコメント（「そうだよね。」「それはびっくりだよね。」）、学習者があいまいな説明に陥った時に、聞き手が説明要求をすること（「それ、どういうこと？」）が、学習者が経験を語る際の談話展開に貢献していることを報告した。

経験を語る談話ではないが、連続する出来事を述べるという意味では一部に共通する展開をもつ「映画のストーリーを語る」談話において、中井（2005）は、語りを語り手と聞き手の相互行為として位置付け、その上で、聞き手に助けを求める（語り手）、語り手の発話構成を助ける（聞き手）、不明な点を質問する（語り手、聞き手）

⁶ Teaching assistant の略。

などの学習項目をあげている。

本稿では、面接のような場面ではなく、人間関係に一定の距離はあるものの、TA や教師を相手にリラックスした雰囲気の中で経験を語るという言語活動を取りあげる。これはレベルとしては CEFR の B1 の言語活動と位置付ける。

3. 経験を語る談話の機能と言語形式

3. 1 先行研究に現れた談話の流れと言語形式

経験を語る談話の流れを大きくとらえる際に、Labov (1972: 363) の掲げる 6 つの要素が参考になる。それは時間軸に沿った 1. 話の概要 (Abstract)、2. 話の場、時、登場人物など (Orientation)、3. 話の中に出てくる事件 (Complicating Action)、4. 評価

(Evaluation)、5. その事件の結末 (Result or Resolution)、6. 話の終結 (Coda) であるが、実際は必ずしもこの順序で現れるわけではなく、全ての要素が現れるわけでもないと言う。

一方、榊原 (前掲) は、メイナード (1989) の物語の構成を参考に、物語の導入部と終結部に注目し、お笑い芸人の体験談の分析をして談話の流れと言語形式も明らかにした。導入部は、Prefacing と Setting から成っているが、Prefacing とは物語への移行を示す前置きの表現である。ここでは「テーマの発表」として「～の話なんですけど」「～なんですけど」)などの言語形式をあげている。

次に Setting では、時間や場所(「～時に／ある日、～ですよ」、「これは～なんですけど」)、人物の描写、出来事が起こった特定の状況(「～たら～んです」)が語られると言う。テーマを終結部は、Resolution、Evaluation、Ending Remarks から成り立っている。

Resolution は、出来事の結果、結論である。ここでは、「～たら～ですよ」のような発見、発現、反応を表すタラの使用、「ドーンと」「ブルブルブル」などオノマトペの使用が臨場感を高める効果をあげていると言う。Evaluation は、聞き手との関連や出来事に対する語り手の反応や、当時の気持ちを表す(「野生はすごいなってことを

学びました」「あれはびっくりしました」)。Ending Remarks は、物語の終了を意味するもので(「っていう話です」)、他の談話への移行を表すものだという。これらを参考に、経験を語る談話の流れと言語形式をまとめると表 1 のようになる。榊原は導入部と終結部を中心に分析しているので、3 の出来事の部分の言語形式はここでは見られないが、先行研究によれば、テ形、～タラ、ソシタラなどを使って時間軸に沿った出来事の展開を表すことが多いと言う。

表 1 先行研究にある談話の要素と言語形式

			Labov (1972)	メイナード (1989)	榊原 (2010)
1	導 入 部	概要、テーマ	Abstract	prefacing	～の話なんです けど
2		時間、場所、 状況	Orientation	Setting	これは、 ～時に、～んで すよ
3		出来事	Complicating Action	Narrative Event	
4	終 結 部	結果、結論	Result or Resolution	Resolution	～たら～んです よ
5		評価	Evaluation	Evaluation	あれはびっくり しました
6		物語の終了	Coda	Ending Remarks	っていう話です

この談話の流れを検証し、言語形式をさらに詳しく分析するために、日本語母語話者の経験の語りを分析することにする。

3. 2 録音データの分析

データは、日本語母語話者による 11 の経験の語りの録音資料である。「恥ずかしい経験」「不思議な経験」などのように身近なテーマを指定し、録音する前に少し話をまとめてもらった後に、「～な経験ってありますか」という質問をして経験を語ってもらった。以下は

データの詳細である⁷。

表 2 母語話者の経験の語り録音データ

	テーマ	語り手 vs. 聞き手	時間(分)	録音日
A	恥ずかしい	教師女 vs. 留学生男	1.39	2010.10.28
B	こわい	教師女 vs. 留学生男	3.57	2010.10.28
C	こわい	大学院生男 vs. 教師女	3.40	2012.10.15
D	焦った	大学院生女 vs. 教師女	2.39	2012.10.15
E	びっくりした	大学院生男 vs. 教師女	2.44	2012.10.15
F	不思議な	大学院生男 vs. 大学院生女	3.22	2013.3.11
G	おもしろい	教師女 vs. 大学院生男	2.36	2013.3.11
H	バカバカしい	大学院生男 vs. 教師女	2.35	2013.5.14
I	焦った	大学院生男 vs. 教師女	3.39	2013.3.11
J	うれしい	留学生男 vs. 学部生女	2.09	2012.4.2
K	うれしい	大学院生男 vs. 大学院生女	0.57	2013.3.11

3. 2. 1 Aの経験の語り

以下はAの経験の語りを文字化したものを表1の談話の要素に従って抜き出したものである⁸。文字化資料は巻末の資料1を参照されたい⁹。時間、場所では、時間を表す言葉（「小さい頃」「大人になったからの話」）を用い、「～んですけれど」で切りだしている。状況には「～んですね」、「～て」の使用、接続詞「で」で展開をしている。出来事には、先行研究であがっていた異主体によるタラの使用があり、「～たら、～んです」の文型が使われている。

⁷ 教師2名、中国語学習のために来台した留学生2名、大学院生5名、学部生1名による録音データ。経験の語り手は全て日本語母語話者で、聞き手はF、J、Kが非母語話者以外、全て母語話者であった。

⁸ 表1の流れには1に概要、テーマがあるが、録音時に既にテーマを指定して言っているなので、この部分は入れない。②の状況を①と切り離したのは、①がいつ、どこで、に相当するものであるのに対して、②の状況は③で何があったかを述べる際の状況を説明している部分で、分けたほうが良いと判断したためである。

⁹ 文字化は宇佐美によるBTSJ（2011版）を参考に行った。

① 時間、場所

1A：みんな恥ずかしかったことは小さい頃の話なんですけど、私は大人になってからの話で…

3A：台湾に来る前に、日本の保健所で健康診断をしたんですけれど…

② 状況

5A：あの、そこでトイレにいったんですね。

8A：それがあって、入って、はあ、なんか、やっぱりその保健所の建物はとても古かったので(はい)、ここは古いから(はい)、トイレも男の人と女の人と一緒に一部屋なんだな、と思って(なるほど)、あたしは個室に入ったんですけれど、そこに個室もあったので…

③ 出来事

11A：で、出てきたら(はい)、ちょっと上を見たら、そこは男子トイレだったんです。

④ 結果、結論

15A：女子トイレは別にあったんです。

17A：だから、あたしはその日は男子トイレに入ってしまった、何も考えないで男子トイレで、あの、終わって、手を洗って(はい)、出てきた。

⑤ 評価

21A：だから、あの男の人はきっと、あたしが変な人だなと思ったと思うんですけど…<笑>

24A：まあ、で、出てきて、恥ずかしいけど、一人でいったし、誰にもその気持ちは伝えられなくて。

⑥ 物語の終了

22A：はい。そういう恥ずかしい経験です。

3. 2. 2 Jの経験の語り

次はJの語りを分析したものである。文字化は資料2を参照されたい。資料1の教師の語りと文体は違うが、語りの談話の流れは共

通している。時間、場所を「～んだけど」で切りだし、状況は「～て」「で」で受け、文末に「～んだよね」を使っている。出来事では、異主体の「～たら」の使用が見られ、文末は言いきりではない「～て」で終わっている。「パッって落ちて」と擬態語を使っている。この他③聞き手の理解を考慮した確認がある。これは語り手のみの語りの構成を示した表1の流れには出てこないが、聞き手が目の前にいる状況では、聞き手を考慮した言葉の確認と説明が行われているためである。

①時間、場所、状況

1J: 嬉しいことねー、嬉しいこと、嬉しいことは、えーっと、僕留学しにきてて、2月の14日に来たんだよね。

2J: まだ来たばかりなんんだけど、留学に来る前に、えー、あれは、えっと、何人か留学する人たちがいて、それで、その人たちと、あと、留学行かない人も含めて、みんなでご飯食べに行ったんだよね。

② 状況、出来事

3J: で、ご飯食べに、まあ、行ってらっしゃい、っていうお別れみたいな感じで、ご飯食べに行ったら、食べてたら、なんか突然こう照明がバッて落ちて、で、ケーキが運ばれてきてて、あれ？誰か誕生日だっけ？って思ったら、実はそれはその留学に行く人たちの「行ってらっしゃ～い」って、「がんばってね」っていう、ケーキで、

③ 聞き手の理解を考慮した確認

4J: 寄せ書きってわかる？

6J: 寄せ書きって、えっと、漢字で書くと、寄せ書き、こうなってるんだけど、(あー)寄せ書きって書いて(うん)、こう真ん中に、行ってらっしゃいって書いてあって、みんなのさ、メッセージが(あー)こう書いてある。

④ 結果、結論

8J: まあ、これくらいの大きさのでっかいやつ、(うん)それ寄せ

書きって言うんだけどさ、それをもらって、びっくりもしました、嬉しかったです、って話。

⑤ 評価

11J:嬉しいよね。

13J:しかも、サプライズって言うのが、また嬉しいよね。

⑥ 物語の終了

15J:こんな感じかな。

3. 2. 3 Gの経験の語り

次はGの語りの分析である。文字化は資料3を参照されたい。切り出しで評価を出している以外は、談話の流れ、時間、場所の切り出しの文型が分析1, 2と共通している。一方、文末は状況を示す「～て」「～んですね」を使い、接続詞「そして」「それで」で状況の展開を示している。結果は、聞き手が促し、聞き手がその答えを聞いて「タチ悪いですね」というコメントを言っている。②に「中野という駅」の「～という」も含め、聞き手の理解を考慮した確認があるのは、聞き手の出身や活動地域が東京から離れた所で、教師が年齢の離れた大学院生に話す状況であったためと考えられる。

① 時間、場所

1G:今から考えると、あれ面白いなっていう話があるんですけど、それってね、20年前の話なんですけど。

② 聞き手の理解を考慮した確認

4G:中野という駅でね(はい)、近くで、ちょうど雨が降ってて、アーケード街ってわかります?、こう、上に屋根があって…

5H:ああ、はいはいはい。

③ 状況

6G:で、アーケード街だったんで、ちょっと屋根がこう途切れるところがあって(はい)、で、雨が降ってたから傘をさしたんですね。

④ 状況、出来事

8G:そして友達と傘をさしていたら(はい)、なんかある男の人たちとすれ違ったら(はい)、すれ違った後に文句を言って来たん

です。

16G: それでずーとしつこくてね (はい)、あのう、どうもやくざだったんですね。

18G: みたいな人で、なんでこんなにしつこい、と思ってて (はい)、でも、その時私とその友達と頭の中に思い描いたことが全然違ってたんです。

⑤ 結果、結論

30H: それで結局それはどっちだったんですか？

33G: 普通のやくざで、ただしつこかったんですね。

36G: ずーと謝り続けて、なんとか私たちが通り過ぎるのを許してくれた…。

⑥ 評価

29G: 今考えると面白いなと・・・

37H: あ～タチ悪いですね。

3. 3 まとめ

3. 3. 1 談話の構成要素

11 人の経験の語りの傾向を表 3 にまとめる。経験の時間や場所、状況、出来事の説明は、すべての語りにあるが、結論、評価、終了は、あるものとなないものがあつた。また B、G のように、冒頭に評価をもってくる例もあつた。李 (1999) によれば、冒頭に出来事発生当時の気持ちを表すのは、聞き手の興味を語り手にひきつける効果があると言う。また、I が切り出しに「そう言えば」を使っているが、「そう言えば」は話を変える機能を持つため、冒頭に来ることが多いと言う。今回はテーマを決めているので話を変える必要はないが、経験を思い出して話し始める際には使いやすい表現なのかもしれない。

一方、相互行為である経験談の語りでは、出来事の説明は語り手側が中心に行うが、結論の促し、評価は聞き手の関わりも大きいことがわかつた。

3. 3. 2 言語形式

言語形式の面に注目すると、時間、場所から始める冒頭は「～の時」「～の頃」「(僕が子供)の頃／(大学生)の時／(大学2年生)の時の話」など時間を表す言葉を使い、「～の話ですけど」「～なんですけど」などの前置き表現が使われている。状況は、「～て」や接続詞「で」「それで」「そして」で展開させ、文末は「～んですね」「～んですよ」を使うことが多い。出来事では、異主体の「タラ」の使用により、意外性をあらわす内容を「～て」「～んです」「～んですよ」で受けている。

ここで終助詞の傾向を挙げると、終助詞の「ね」は、状況を説明する文末に多く、「よ」はそこで何が起こったか、中心的な出来事を語る文末に多い。一般に「ね」と「よ」の機能は、以下のようにAが（一緒に映画を見て）共通の情報を持っている者同士で共感、確認の機能があるのに対して、Bは相手の知らない情報を伝える機能があると言われている。

A. 映画、おもしろかったね

B. 映画、おもしろかったよ

しかし、本稿の経験の語りの中に現れる「ね」は、「そこでトイレに行ったんですね」「みんなでご飯を食べに行ったんだよ」「雨が降っていたから傘をさしたんですね」のように、聞き手の知らない情報を伝える時に使われている。こうした「ね」の機能について壺豆原（2001、2003）は、聞き手を語り手の提供する情報の中に引き込み、共感的に話を進める機能を持っていると言っている。つまり、経験を語る際の情報は語り手しか知り得ない情報だが、それを一方的に話すのではなく、聞き手に確認するような形をとりながら語り手の作りだす場に聞き手を引きこみ、共通認識、共感領域を形成していくのだと言う。

最後の結末がどうなったかを示す文末は、「～んです」が多いが、「～んですかね」「～みたいなんですけど」「～かなと思って」のように自分の解釈を結末に添える例もあった。これは評価を述べてい

るとも言え、結論と評価は分かちがたく結びついていることがわかった。ただし、明確な形としての評価は形容詞で話をまとめることが多い。これはもともとテーマを指定しているので、不必要なようにも思えるが、本稿のデータの語りの多くが最後に形容詞で締め括ることが多かったことを考えると、評価は先行研究にあるように経験の語りの終結部に現れる代表的な要素であると言える。

尚、聞き手の理解を考慮した確認は、今回のデータでは少ないが、接触場面が増えると、この談話の要素が増えることが予想される。

表 3 言語形式のまとめ

	1	2	3	4	5	6	7 ¹⁰
A	～んです けれど	～て ～んです けれど	～たら～ んです	～て ～んです	恥ずかし い	はい、そう いう恥ず かしい経 験です	
B	死ぬかと 思ったん ですけど ね、～時に	～ですね	そしたら ～んです よ	～て ～たんで す	怖かった です	今は～い ます	
C	～て ～んです よ	～て	～んです よ	～たら ～て	怖かった です	×	
D	～て、その 時に、 ～ですけ ど	～て	～て	～みたい なんです けど	焦りまし たね、 よかった です	×	
E	～の頃の	～んです	～んです	～んです	すごくび	×	

¹⁰ 1 は時間・場所、2 は状況、3 は出来事、4 は結果、5 は評価、6 は終了、7 は聞き手の理解を考慮した語り手の確認／聞き手が不明点を確認する、を表す。

	話ですけれども	ね	よ、 ～んです ね	けど	つくりしました		
F	～の時な んですけれども	～て、 ～んです よ	～たら～ たんです よ	～ですか ね	×	そういう 体験です	～ってな んですか
G	面白いな っていう 話、 ～なんで すけど	～て、～ん ですね、で そして	～たら ～んです	～です ～んです ね	面白いな と タチ悪い ですね ¹¹	×	ってわか ります？
H	～の時で すけれども	～と ～んです よ	～たら ～たんで すよ、そし たら、～て	～ですか ね	相当ばか ですよ	×	
I	そういえ ば昨日 ～て	～て	そしたら ～たら ～て	～かなっ て思っ て	それ、災難 ですね	×	
J	～前に ～んだよ ね	～て ～たら	～て	～て ～って話	うれしい よね	こんな感 じかな	ってわか る？
K	～の時に ～んです けれども	はじめの ほうは～ けれども 途中から	最後に ～ました	×	一番うれ しかった へえ、意外 ですね	×	

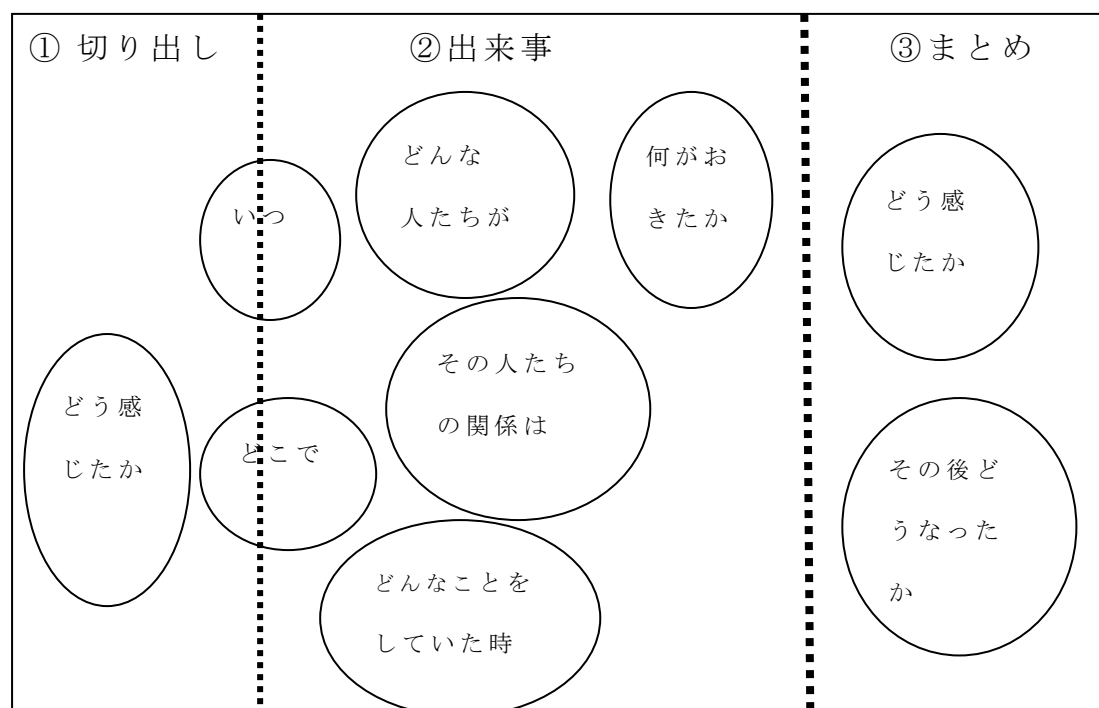
4. 既に出版されている教材

次に既に出版されている教材の経験を語る場面で、どのようなシ

¹¹ 斜体は聞き手が言った言葉。

バランスを提示しているのかをしてみる。経験を語るためのシラバスを提供している教材は多くないが¹²『上達日本語表現—きちんと伝える技術と表現—』には、同じようなテーマを決めた場面で、最近の出来事を話す練習が設定されている。

図 1 経験の語りの構成要素



(『上達日本語表現—きちんと伝える技術と表現—』p. 80 より)

経験の語りの構成要素として①相手の注意を引くための切り出し、②出来事、③まとめが提示され、図 1 のように談話の要素が示されている。これらの談話の要素は、先行研究と今回の母語話者の語りのデータ分析で得られた要素とほぼ一致する。しかし、この場面の教材としては、談話に沿った文型が提示されていないこと、経験を語る談話と直接関係のないと思われる引用の表現が練習の対象となっていることがシラバスの不足を感じさせるところである。また経験を語るモデル文として聞き手不在のモノログが示されているのみ

¹²『日本語会話力』(2011: 76)、『できる日本語初中級』(2012: 116)にも似たような場面設定で語りの例が示されているが、どのように談話を組み立てるかといった詳しい指示はない。

で、相互行為としてのシラバスは提示されていない。

5. シラバスの提案

5. 1 相互行為としてのシラバス

以上の分析と既に出版されている教材のシラバスを見て、最後に学習者に向けたシラバスの提案を行う。シラバスを提示する時に重要なのは課題遂行の指標である。どのようなことができれば課題が遂行したと言えるのか、一定の目安を示すことで学習者にも目標が示されるからである。その課題を遂行するために必要な言語形式や談話の要素、社会言語学的な要素を組み立てて談話を構成する必要がある。一方、相互行為である以上、聞き手にも考慮し、必要があれば協力を求めるようなストラテジーも必要である。また、これらを総合してシラバス案を表4に提示した。

表4 経験を語るシラバス案

レベル	B1
課題達成の指標	・ いつ、どこでどのような出来事があったのかを説明できる。 ・ その時の感情や反応を説明できる。 ・ 聞き手の理解に応じて話ができる ・ 言いたい言葉が言えない時、聞いてわからない時に聞き手に助けを求めることができる
文型表現語彙 ¹³	・ 前置き表現⇒<時の表現：～前の、～の頃>のことなんです（だ）けど（けれども） ・ 接続詞：で、それで、そしたら、 ・ 文末：～ました、て形、～んです（ね） ・ ～たら～んです（よ） ・ <評価に係する形容詞>～ました／～かったです

¹³ 語彙は、経験の内容によって幅広いものになる。例えば同じ怖い経験というテーマでも、出来事が人によって違うので、ここでは語彙を特定せず、学習者が自身の語りを組み立てていくのを手伝いながら必要な語彙を提示していくのが望ましい。

	★オノマトペを使うと、生き生きと状況が再現できること¹⁴、「ね」と「よ」の機能、「～て形」や「～けど」など言いさしで終わる効果を教える。これらはこのレベルでは必ずしも使えなくてもいいが、より効果的な語りになることを紹介する。
談話管理	・ 談話の開始部（出来事の時間や場所を提示して切り出す） ・ 談話の主要部（状況と出来事を説明する） ・ 談話の終結部（どう感じたか、結果があれば述べる）
ターンの受け渡し	・ 一方的ではなく、相手の理解を確認しながら話を進め、質問をされれば、それに答える
ストラテジー	・ ～は何と言いますか（言葉が見つからない時） ・ ～ですか？（言葉がよくわからない時に聞き返す） ・ すみません、もう一度お願いします（繰り返し要求）
社会言語能力	・ 聞き手が誰か（親疎、上下関係）によって文体の使い分け（ですます体 vs. 普通体）ができる

5. 2 課題

ただし、言語形式に関しては、今回のデータで一定の傾向を見せたものの明確に決められない要素が残る。聞き手が誰かによって使用する文体は異なり、文末で使われる「～んです」や「～けど」「て形」等言いさしの表現、終助詞の使用は、B1 レベルの言語活動を目指す学習者には難しいことが予想され、どのような言語形式をどこまで求めるかは、学習段階に応じて提示のし方を考えていかなければならない。例えば、終助詞の「ね」「よ」を使った文末表現は聞き手の共感を呼び起こし、メリハリの効いた語りに行うことができるが、必須の表現とは言えず、初級が終わって中級に入ったばかりの学習者には、最初はその機能を理解させるにとどめるのが妥当ではないかと考える。榊原（前掲）は、導入部の「これは～んです

¹⁴ オノマトペの使用は今回のデータには少なかったが、先行研究にはあり、状況を生き生きと伝えるためには効果的な方法だと考える。

けど」は頻繁に現れる表現なので、初級の段階で提示してもよいと言っているが¹⁵、こうした前置きに、「～ました」「それで」「～たら～んです」「形容詞～かったです」を使って短い談話を組み立てる練習からスタートし、段階的に「～んです」や「～けど」「て形」等言いさしの表現、終助詞を使って談話をコントロールできるように指導していくという方法もある。

いずれにしても、こうした言語形式をどの段階でどのように提示するのがベストかを決めるためには、さらに基礎研究を積み重ねて、検証していかなければならない。これは今後の課題と言えよう。

6. おわりに

以上、文献から談話の要素を整理し母語話者の発話データにより経験を語るための談話の流れと言語形式を分析して、学習者のためのシラバスを提案した。文献で得られた談話の要素を、実際の語りの分析の中で検証することができ、経験を語る際の談話の流れと言語形式の傾向を見出すことができたが、シラバスをさらに具体的なものにするには、今後もデータの分析を続けていかなければならない。特に、CEFR や JF スタンダードで言われる B1 は初級から中級に進んだ段階であると言われるが、このレベルの言語形式と評価基準の関係をより明確にしていく必要がある。

尚、母語話者の発話を分析したのは、学習者の発話を母語話者と同じようにすることを目指しているわけではなく、これまで情報の少なかった談話の要素や文型や表現を明らかにするためである。母語話者でも、年齢や性別、経験内容により、相手により、用いる言語形式が同じではないことは当然であるが、こうしたバリエーションの中で、学習者が自分らしい言い方を身につけていけるように指導していく必要がある。経験の語りの多様性に今後も注目し、母語話者や非母語話者による語りの分析を増やしながらシラバスの基礎研究を続けていきたい。

¹⁵ 榑原 (2010 : 126)

参考文献

- 伊豆原英子 (2001) 「「ね」と「よ」再再考」『愛知学院大学教養部紀要』 49 (1)、pp. 35-49
- (2003) 「終助詞「よ」「よね」「ね」再考」『愛知学院大学教養部紀要』 51 (2)、pp. 1-15
- 宇佐美まゆみ (2011) 「基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) を用いた研究方法 (コーディングの仕方) 2011 年版」
- <http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/btsj2011.pdf>
- (アクセス日 2013 年 8 月 20 日)
- 加藤陽子 (2003) 「日本語母語話者の体験談の語りについて—談話に現れる事実的な「タラ」「ソシタラ」の機能と使用動機—」『世界の日本語教育』 13、pp. 57-74
- 川合理恵 (2003) 「日本語母語話者の「思い出」における談話分析—談話の結束性の観点から—」『台湾日本語教育論集』 第 7 号、pp. 93-117
- 木田真理・小玉安恵 (2001) 「上級日本語学習者の口頭ナラティブ能力の分析」『日本語国際センター紀要』 第 11 号、pp. 31-49
- 工藤節子 (2011) 「〈～できる〉を可能にするシラバスの検証—交渉会話型の会話シラバスの一考察—」『台湾日語教育學報』 第 17 号、pp. 215-241
- (2013) 「＜印象深い経験を語る＞言語活動に見る学習支援者の支援」銘傳大學 2013 國際學術研討會：應用日語教育的理論與實踐
- 国際交流基金 (2009) 『JF 日本語教育スタンダード試行版』
- 榊原芳美 (2010) 「物語の始まりと終わり—笑いのプロは過去の経験をどう語るのか—」『関西外国語大学留学生別科 日本語教育論集』 20 号、pp. 119-132
- 島津百代 (2004) 「接触場面における異言語話者の日本語のナラティ

ブ分析のための一考察』『大阪大学言語文化学』vol. 3、p. 175-184

(2005)「ストーリーテリング活動における日本語学習者の
第二言語リテラシーの実践」第2回「リテラシーズ」研究会

http://literacies.9640.jp/dat/workshop02_1.pdf

(アクセス日 2013年7月31日)

中井陽子 (2005)「談話分析の視点を生かした会話授業—ストーリー
テリングの技能指導の実践報告」『日本語教育』126号、p. 94-103

中井陽子・大場美和子・土井真美 (2004)「談話レベルでの会話教育
における指導項目の提案—談話・会話分析的アプローチの観点
から見た談話技能の項目」『世界の日本語教育』14、pp. 75-91

増田真理子 (2000)「日本語学習と母語話者のストーリーテリング文
を比較する—4コマ漫画のストーリー内容を書いたテキスト
の分析から」『多摩留学生センター教育研究論集』第2号、
pp. 13-25

メイナード、泉子. K. (1993)『会話分析』くろしお出版

矢部まゆみ (2003)「「人生の3大事件」を聴く、語る—早稲田オレ
ゴンプログラム「ワークショップ」での試み—」『講座日本語
教育』第39分冊、pp. 101-121

李麗燕 (1998)「日本語母語話者の雑談における「物語の終了」—物
語を終了するために語り手が行う言語行動を中心に—」『日本
語教育』96号、pp. 85-96

(1999)「日本語母語話者の雑談における「物語の開始」—物
語を開始するために語り手が使う言語表現を中心に—」『日本語
教育』103号、pp. 59-68

(2000)『日本語母語話者の雑談における「物語」の研究—会
話管理の観点から—』くろしお出版

Labov, W. (1972) *Language in the Inner City*. Philadelphia:
University of Pennsylvania Press.

Maynard, S. K. (1989) *Japanese Conversation:
Self-contextualization through Structure and*

Interactional Management. Norwood: Ablex Publishing Corporation.

<教材>

奥村真希・釜淵優子（2011）『日本語会話力』アルク

荻原雅佳子・増田眞沙子・斎藤眞理子・伊藤とく美（2006）『上達日本語表現—きちんと伝える技術と表現—』大新書局

できる日本語教材プロジェクト（2012）『できる日本語初中級』アルク

資料 1

A 文字化資料（テーマ：恥ずかしかったこと、A：教師、B：留学生）

1A：えっと、すごく、なんか、みんな恥ずかしかったことは小さい頃の話なんですけど（はい）、私は大人になってからの話で…

2B：はい。

3A：あの、日本の…あっ、台湾に来る前に（はい）、日本の保健所で健康診断をしたんですけど…

4B：はい。

5A：あの、そこでトイレにいったんですね。

6B トイレに、はい…

7A：で、トイレに行ったら、なんか、あの、男の人ってほら、男の人のトイレの（はい）…があるじゃないですか、（そうですね）女の方は個室だけど、個室じゃない。

8A：それがあって、入って、はあ、なんか、やっぱりその保健所の建物はとても古かったので（はい）、ここは古いから（はい）、トイレも男の人と女の人と一緒に一部屋なんだな、と思って（なるほど）、あたしは個室に入ったんですけど、そこに個室もあったので…

9A：あっ、個室に入ったわけですね。

10A：はい。

11A：で、出てきたら（はい）、ちょっと上を見たら、そこは男子トイレだったんです。

12B：＜笑い＞男子トイレですか。

13A：女子トイレは隣にあったんです。

14B：あったんですか、女子トイレも。

15A：女子トイレは別にあったんです。

16B：はい。

17A：だから、あたしはその日は男子トイレに入ってしまったって、何も考えないで男子トイレで、あの、終わって、手を洗って（はい）、出てきた。

18A：で、中で男に人にも会ったんです。

19B：会ってしまったんですか、＜笑＞

20A：会ってしまった、＜笑＞

21A：だから、あの男の人はきっと、あたしが変な人だと思ったと思うんですけど…＜笑＞

22B：はい、そうですね。＜笑＞

23B：びっくりしますね。

24A：まあ、で、出てきて、恥ずかしいけど、一人でいったし、誰にもその気持ちには伝えられなくて。

25A：はい、そういう恥ずかしい経験です。

26A：以上です、すいません。

27B：ありがとうございました。

28A：はい。

資料 2

J 文字化資料（テーマ：うれしいこと、J：留学生、K：学部生）

1J：嬉しいことねー、嬉しいこと、嬉しいことは、えーっと、僕は、留学しにきてて、2月の14日に来たんだよね。

2J：まだ来たばかりなんだけど、留学に来る前に、えー、あれは、えっと、何人か留学する人たちがいて、それで、その人たちと、あと、留学行かない人も含めて（うん）、みんなでご飯食べに（はい）行ったんだよね。

3J：で、ご飯食べに、まあ、行ってらっしゃい、っていうお別れみたいな感じで、ご飯食べに行ったら、食べてたら、なんか突然こう照明がバツて落ちて、で、ケーキが運ばれてきて、あれ？誰か誕生日だっけ？って思ったら、実はそれはその留学に行く人たちの「行ってらっしゃ〜い」って、「がんばってね」っていう、ケーキで…、

4J：寄せ書きってわかる？

5K：寄せ書き？

6J：寄せ書きって、えっと、漢字で書くと、寄せ書き、こうなってるんだけど、（あー）寄せ書きって書いて（うん）、こう真ん中に、行ってらっしゃいって

書いてあって、みんなのさ、メッセージが(あー)こう書いてある。

7K:カードみたいな…

8J:まあ、これくらいの大きさのでっかいやつ、(うん)それ寄せ書きって言うんだけどさ、それをもらって、びっくりもしました、嬉しかったです、って話。

9K:うん。

10J:そう、友達からのお祝いは。

11J:嬉しいよね。

12K:うん、そうそう。

13J:しかも、サプライズって言うのが、また嬉しいよね。

14K:そうそう。

15J:こんな感じかな。

資料 3

G 文字化資料 (テーマ: おもしろいこと、G: 教師、H: 大学院生)

1G: 今から考えると、あれ面白いなっていう話があるんですけど、それってね、20 年前の話なんですけど。

2H: はい。

2G: あの、まだ東京で働いてた時なんですけど (はい)、同僚と、美味しいラーメン屋があるからってね (はい)、ラーメンを食べにいったんです。

3H: はい。

4G: 中野という駅でね (はい)、近くで、ちょうど雨が降ってて、アーケード街って分かります?、こう、上に屋根があって…

5H: ああ、はいはいはい。

6G: で、アーケード街だったんで、ちょっと屋根がこう途切れるところがあって (はい)、で、雨が降ってたから傘をさしたんですね。

7H: はい。

8G: そして友達と傘をさしていたら (はい)、なんかある男の人たちとすれ違ったら (はい)、すれ違った後に文句を言って来たんです。

9H: えっ?

10G: 怖い人だったんですよ。

11H: ええ?

12G: それで、何か傘がこう当たったらしいのね。

13H: はい。

14G:それで、すいません、すいませんって言ってるんだけど(はい)、全然許してくれなくて(はい)、普通だったら、すいませんって言ったらくもういいじゃないですか>{<}。

15G:<はい、そうですね>{>}

16G:それですーとしつこくてね(はい)、あのう、どうもやくざだったんですね。

17H:おお！

18G:みたいな人で、なんでこんなにしつこい、と思っで(はい)、でも、その時私とその友達と頭の中に思い描いたことが全然違ってたんです。

19H:はい。

20G:その友達は、これは大変だ、やくざだ！この近くに、中野駅の近くに<笑>自分の友達が弁護士をやってる。

21H: ああ。

22G:だから、この後早く弁護士と連絡して色々問題を解決しなきゃと思ったらしいんですね。

23H:はいはいはい。

24G:で、私は全然そういうことを考えなくて、ずーとこの人は何故こんなに怒ってるかと<笑>。

25G:それで、もしかしたらカツラじゃないかと<笑>

26H:ああ、なるほど！

27H:かつらをね、傘が当たってカツラを落としてしまった？<笑>

28G:だからね、そんなに執念深くね(はい)、言ってるかなと思っで、まあ20年前の話なんですけど、それがちょっと、まあ全然違うこと考えてたんですね。

28H:ああ…

29G:今考えると面白いなと…

30H:それで結局それはどっちだったんですか？

31H:カツラだったんですか？

32G:カツラじゃないです。

33G:普通のやくざで、ただしつこかったんですね。

34H:で、結局弁護士に…？

35G:しなかったです。

36G:ずーっと謝り続けて、なんとか私たちが通り過ぎるのを許してくれた…。

37H:ああタチ悪いですね。

38G:はい、タチ悪いです。